

宴と儀礼歌

— 卷一・八四番歌の解釈を中心に —

曹 咏梅

一 はじめに

上代において宴は詩歌を生成する一つの場としてある。宴は主に年中行事として、時には臨時に催され、酒食を共にすることで参加者の間には親和関係が成立し、相互の親交を深めることを目的としている。こうした宴では儀礼的な歌が歌われており、『古事記』や『日本書紀』から酒宴歌謡の存在を確認できる。土橋寛氏は「酒宴の最初は儀式的部分で、主人側は正客に盃を勧めて、その長寿・繁栄を寿ぐ歌を歌い、正客はこれに対して酒を謝する歌を返す」と述べ、前者を勧酒歌、後者を謝酒歌と呼び、宴ではほかにも立歌、送り歌などの儀式的な歌が歌われたことを指摘している。『万葉集』の宴の歌についても、同氏が「万葉の創作歌も、集団的な宴席の歌やはり酒宴歌謡の約束を踏まえて作られている」と述べるように、酒宴歌の流れを汲んでいるのではないかと考えられる。そこで、今回は巻一雑歌の掉尾を飾る長皇子の歌を中心に宴と儀礼歌について考えていきたい。歌は以下の通りである。

長皇子の志貴皇子と佐紀宮に俱に宴せる歌

秋さらば今も見ること妻恋ひに鹿鳴かむ山そ高野原の上（巻一

・八四）

右の一首は長皇子^③

当該歌における鹿が鳴くことについて、『万葉集講義』が「これは此の御宴の席に鹿の山に在りて妻を恋ひ鳴ける状を象れる州濱をかざりてありしか。又はその状をかける絵などの障子屏風などをたててありしならむ。」と指摘して以来、『全註釈』などはこの解釈を受け継いでいる^④。従来の研究者が実景あるいは絵の中の景色と捉えた一方で、中西進氏は「『詩経』の賓客を遇する詩『鹿鳴』を踏襲する」と指摘し、『新編全集』にも「『毛詩』（小雅・鹿鳴）の宴会の詩に倣ったか」とある^⑤。

当該歌が宴の場で詠まれたことと、宴の儀式性とを合わせて考えれば、長皇子がわざわざ「鹿鳴かむ」と詠み込むことは、秋の景観として描くためのみならず、『詩経』の「鹿鳴」との関わりを示唆していると考えざるを得ないであろう。本稿ではそのことを中心に考察しながら、中国の酒宴の詩歌との比較から当該歌の儀礼的性格を明らかにしていきたい。

二 宴と「鹿鳴」

当該歌の題詞に見える「佐紀宮」は長皇子の宮を指し、奈良市佐紀町にあったと考えられる。「秋去者」は秋になるとの意である。「高野原」は集中に用例がなく、『続日本紀』に「丙午、高野天皇を大和国添下郡佐貴郷の高野山陵に葬りまつる。」とあり、「奈良市佐紀町の佐紀丘陵の西南方一帯」⁹⁾と思われる。当該歌においては「今も見るごと」と「鹿鳴かむ」の解釈が重要であり、それによって歌が詠まれた季節、歌の詠む景などが明らかになるのではないかと考える。「今も見るごと」は集中に当該歌以外に四例見られる。

①遠妻の ここにあらねば 玉梓の 道をた遠み 思ふそら 安けなくに 嘆くそら 安からぬものを み空行く 雲にもがも 高飛ぶ 鳥にもがも 明日行きて 妹に言問ひ わがために 妹も事無く 妹がため われも事無く 今も見るごと 副ひてもがも (巻四・五三四)

②物部の 八十伴の緒の 思ふどち 心遣らむと 馬並めて うちくちぶりの 白波の 荒磯に寄する 洪谿の 崎徘徊り 松田江の 長浜過ぎて 宇奈比川 清き瀬ごとに 鶴川立ち か行きかく行き 見つれども そこも飽かにと 布勢の海に 船浮け据ゑて 沖辺漕ぎ 辺に漕ぎ見れば 渚には あぢ群騒ぎ

鳥廻には 木末花咲き 許多も 見の清けきか 玉匣 二上山に 延ふ薦の 行きは別れず あり通ひ いや毎年に 思ふどち かくし遊ばむ 今も見るごと (巻十七・三九九一)

③常世物この橘のいや照りにわご大君は今も見る如 (巻十八・四〇六三)

④はしきよし今日の主人は磯松の常にいまさね今も見るごと (巻二十・四四九八)

①は安貴王が因幡の八上出身の采女と契りを結んだが、後に采女が故郷へ追放になった時に詠んだ歌である。遠く離れた妻はここにいないので、明日にも早速出かけて妻に言葉をかけ、この目で見られるように一緒にいたいことだと詠む。ここでの「今も見るごと」は今眼前の状況を詠むのではなく、常に見られるような自分の願望を表している。②③④はすべて大伴家持の歌である。②は家持が官人らとの、布勢の水海の遊覧を詠んだ賦であり、毎年のようにこうして遊ぼう、今見ているようにと歌を締めくくっている。今のような親しい同士との遊覧が常にあつてほしいと詠むのである。③は、天平二十年に天平十六年の歌に和したもので、大君は今も見えているように常世の橘のように輝いてくださいと、天皇を寿ぐ歌になつてゐる。わが大君は自分の心の中或いは自分が思い浮かべる大君の姿であり、決して今日の前にいるのではない。④は七五八年二月に式

部大輔中臣清麿朝臣の宅に宴が開かれた時に、家持が「慕わしいこの日の主人は磯松が常緑であるように変わらなくおいでください、今見てるように」と詠む歌である。家持は主人清麿の健康と長寿を、「今も見るごと」と常に祈っていると詠む。宴で主人が目の前にいながら詠むこの「今も見るごと」は、実際見ている主人の像に、自分の理想とする主人の健康・無事の姿を重ね合わせていると思われる。このように、「今も見るごと」の「今」とは理想的な空間と時間を象徴するものであり、さらにそれが常にあつてほしいという切実な願いが込められた表現であるといえよう。

次に「鹿鳴かむ」についてであるが、『万葉集』に「鹿鳴」を詠んだ歌は多いが、題詞と左注によって宴席で詠まれたものと判断されるのは、当該歌以外には一首だけである。

大和へに君が立つ日の近づけば野に立つ鹿も響みてそ鳴く（巻四・五七〇）

これは大宰帥大伴旅人が大納言に任ぜられ、上京しようとした時に、大宰府の官人たちが筑前国の蘆城の駅で送別の宴を開き、当時大宰大典だった麻田陽春が詠んだ歌である。集中の「天平二年庚午。冬十二月に、大宰帥大伴卿の京に向ひて上道せき時に作れる歌」（巻三・四四六題詞）、「天平二年庚午の冬十一月に、大宰帥大伴卿の、

大納言に任けられて京に上りし時」（巻十七・三八九〇題詞）との記録から、大伴旅人の大納言の任命は天平二年冬十一月で、実際大宰府を離れたのは十二月になってからだと思われる。そうすると、この歌は冬十一月頃に詠まれたものと考えられる。冬の時期に鹿が鳴くように詠んでいるのは、それが実景であるよりも、送別の宴であるために「鹿鳴」を詠み込んだと見るべきである。これについては、『詩経』小雅の「鹿鳴」によつたとする説がある一方で、馬駿氏は『詩経』の「鹿鳴」は直接の出典ではないとし、「五七〇番歌の『鹿鳴』は蘇武の詩に暗示を得た」と述べている。五七〇番歌は「鹿鳴」詩と蘇武詩を下敷きにしているといわれているのであるが、まず『詩経』小雅の「鹿鳴」について見てみたい。

呦呦鹿鳴 食野之苹

呦呦として鹿鳴き、野の苹を食む。

我有嘉賓 鼓瑟吹笙

我に嘉賓有り、瑟を鼓し笙を吹く。

吹笙鼓簧 承筐是將

笙を吹き簧を鼓す、筐を承けて是れ將む。

人之好我 示我周行

人の我を好せば、我に周行を示せ。

呦呦鹿鳴 食野之蒿

呦呦として鹿鳴き、野の蒿を食む。

我有嘉賓 德音孔昭

我に嘉賓有り、德音孔だ昭なり。

視民不怵 君子是則是傲

民を視ること怵からず、君子是れ則り是れ傲ふ。

り是れ傲ふ。

我有旨酒 嘉賓式燕以敖 我に旨酒有り、嘉賓式で燕し以て敖ぶ。

呦呦鹿鳴 食野之芣 呦呦として鹿鳴き、野の芣を食む。

我有嘉賓 鼓瑟鼓琴 我に嘉賓有り、瑟を鼓し琴を鼓す。

鼓瑟鼓琴 和樂且湛 瑟を鼓し琴を鼓し、和樂して且つ湛む。

む。

我有旨酒 以燕樂賓之心 我に旨酒有り、以て嘉賓の心を燕樂す。⁽¹²⁾

『毛伝』に「鹿得芣、呦呦然鳴而相呼、懇誠發乎中。以興嘉樂賓客當有懇誠相招呼以成礼也。」とあり、鹿がゆうゆうと鳴いて友を集めて共に芣を食べているのを以て、賓客を招いて饗宴することを興したのだという。詩は三章あり、すべて「呦呦鹿鳴、食也之芣(蒿、岑)」から歌い始める。鹿がゆうゆうと鳴いて友を集めて草を食べている。それと同じく我も賓客を招いて酒肴を共にすると詠む。一章は宴で音楽を奏し、贈り物を贈り、客に善き道を進言することを求める内容で、主人のもてなしと主人の謙虚な気持ちを詠み、二章は「我有嘉賓、德音孔昭」と嘉賓の徳を称えて、君子はその徳に則り倣うべきことを詠み、いわゆる賓客を褒め称える内容であり、三章は酒肴と音楽で賓客をもてなし、うち解けて胸の底から楽しむことを願う内容である。詩の「我」は宴を催した主人であろう。「詩序」

には「燕群臣嘉賓也、既飲食之、又實幣帛筐篚以將其厚意、然後忠臣嘉賓得尽其心矣」とあり、「我」を王と見なして、群臣嘉賓を燕する詩であるという。そのため古くから君臣和樂の宴を象徴するものとされて、後世にも受容されている。しかし、境武男氏は「嘉樂する賓客は同族の代表者たちであり、毛詩序の付説するように『群臣』ではない。」⁽¹³⁾といい、金啓華氏も「貴族宴賓之歌、对嘉賓的忠告表示感激、享以美酒」と、貴族が賓客を宴する歌と捉えている。確かに詩の内容からは「我」が王を指し、賓客が「群臣」であると判断しかねる。鹿鳴は『後漢書』に「鹿哀鳴而求其友」とあるように友を求める声である。小雅「伐木」にも「嘯其鳴矣、求其友声」とあり、『詩経』における動物の鳴き声は友を求める声でもあったと考えられる。「鹿鳴」詩は鹿鳴の声、和合を象徴する琴瑟の音楽、宴で一体化する酒を詠み込むことで、主人と賓客の和樂を表したのであろう。「和樂且湛」は、小雅「常棣」に「兄弟既に翕ひ、和樂し且つ湛む」とあるように、兄弟の和樂にもいえるもので、決して君臣関係とは限らない。朱熹は「『燕礼』亦云、『工歌鹿鳴、四牡、皇皇者華』、即謂此也。郷飲酒用樂亦然。而『学記』言『大学』始教胥雅肄三、亦謂此三詩。然則又為上下通用之樂矣。豈本為燕群臣嘉賓而作、其後乃推而用之郷人也欤？」⁽¹⁴⁾と、『儀礼』には樂工が鹿鳴、四牡、皇皇者華を歌うとあるが、それはこの詩をいい、本来は王朝において群臣嘉賓を燕する時に音楽に合わせて歌い且つ奏したものの

であるが、上下通用するようになり、後に郷人の酒宴にも用いるようになったかといひ、朝廷の饗宴の歌が民間に広まったのではないかといふ。朱熹が『儀礼』を引用していうように、「鹿鳴」は朝廷の饗宴の樂歌として用いられたのである。朝廷の饗宴であるがゆえに、そこには当然君臣關係が生まれて、「詩序」の解釈も十分理解できるのだが、それは詩の意味よりもあくまで朝廷の樂歌としての機能を重んじた結果によるものではないだろうか。そして、朱熹がいうように朝廷の樂が民間に通用することも考えられるが、反対に民間から宮廷に移入される経路も考えられるだろう。つまり、民間での酒宴の歌が朝廷に集められて、さらに加工され、樂を合わせて朝廷の音樂となり、それを儒教側からは「燕群臣嘉賓」と政治的に解釈したのである。詩の最後に「我有旨酒、以燕樂嘉賓之心」と締めくくるように、旨い酒で賓客の心を樂しませることが目的で、詩の主旨は主人と賓客の「和樂」であつて、詩の本義は酒宴における主人側の挨拶、酒を勧めることにあるのではないかと思われる。主人側の挨拶と酒を勧める意もあつたから、王や貴族の宴会の音樂として用いられて、また樂工によつて歌われたのであるう。

後世における「鹿鳴」の受容は、馬駿氏¹⁹⁾がすでに詳細に論じられており、それ以上触れることはしないが、『文選』の「遠慕鹿鳴君臣之宴」（曹子健「求通親親表」）、「飛龍鹿鳴」（嵇康「琴賦」）、次にあげる蘇武の詩などからは、君臣和樂、音樂、友情を意味する

言葉として受容されたことが知られる。ここに蘇武の詩を見てみたい。

骨肉縁枝葉 結交亦相因
骨肉枝葉に縁り、交を結ぶも亦相因る。

四海皆兄弟 誰為行路人 四海皆兄弟、誰か行路の人と為さん。
況我連枝樹 與子同一身 況んや我は連枝の樹、子と同じく一身なるをや。

昔為鴛與鳶 今為參與辰 昔は鴛と鳶と為り、今は参与辰と為る。

昔者常相近 邈若胡與秦 昔者は常に相近づきしに、邈として胡と秦との若し。

惟念當離別 恩情日已新 惟離別するに當りて、恩情日に以て新なるを念ふのみ。

鹿鳴思野草 可以喻嘉賓 鹿鳴きて野草を思ふ、以て嘉賓を喩ふ可し。

我有一罇酒 欲以贈遠人 我一罇の酒有り、以て遠人に贈らんと欲す。

願子留斟酌 敘我平生親 願はくは子留まりて斟酌し、此の平生の親を敘せよ。²⁰⁾

これは蘇武が李陵に贈った詩である。鹿が鳴いて野草を食む如く、私も君を嘉賓にみなして惜別の宴を開いて送別をするという詩である。ここには宴・惜別・友情が詠まれており、馬駿氏は「朋友關係を示す『鹿鳴』であつて、『小雅』以来の上下關係を強調する『鹿鳴』ではない」と指摘している。小雅「鹿鳴」の詩はすでに述べた通り、詩の内容は必ずしも上下關係ではない。この詩における「鹿鳴」は、友人を賓客とみなして二人の友情を深める意において踏まえられたものと考えられ、また嘉賓をもてなす酒宴そのものをも示していると思われる。そして詩の最後には旅立つ君に酒を勧めて、しばらく引き止めたいと詠むことから、「鹿鳴」は勸酒の意も抱え込んでいる。『万葉集』の麻田陽春の五七〇番歌に戻るならば、惜別の宴ということにおいては蘇武の詩と共通しており、蘇武の詩から暗示を得たということも考えられるが、酒宴を開き、別れる人を最大にもてなすことで、友情を深めようとするのであり、やはり「鹿鳴」詩を受け継いだと見るべきであろう。五七〇番歌の「鹿も響みてぞ鳴く」は、漢籍を踏まえることでそこに自分の心情を託した和歌表現であると思われる。

また、日本の上代文献においては、『懷風藻』に長屋王の宅で新羅客を迎えて送別の宴が開かれた折りに詠まれた、刀利宣令の「相顧鳴鹿爵 相送使人歸」（「秋日於長王宅宴新羅客」）、背奈王行文の「嘉賓韻小雅 設席嘉大同」（「秋日於長王宅宴新羅客」）の例があ

るが、ここでの「鳴鹿」「小雅」は明らかに「鹿鳴」に基づく表現であろう。刀利宣令は鹿鳴を歌って酒を勧めて送別の意を表すと詠み、「鹿鳴」は送別宴、友好關係を表すと同時に、酒宴において酒を勧める意を合わせ持っていると考えられる。宴席の詩歌に「鹿鳴」が詠み込まれるのは、「鹿鳴」詩を強く意識していることが確認できる。

長皇子の歌に戻って考えてみよう。秋になったら、今のようにな恋いの鹿の声が響く山なのです、この高野原の上は、と詠む歌である。「今も見るごと」は前に述べたように必ずしも眼前の状況を詠むとは限らないから、ここでは今のような和楽の宴が常にあつてほしいという願いが込められたと見てよいであろう。志貴皇子を賓客とみなしてもてなし、二人の友情關係を示すために「鹿鳴」を踏まえたのである。「妻恋ひに鹿鳴かむ」は、友情を求める声が恋情に変容されたのであるが、『万葉集』では鹿の鳴き声に自分の恋情を重ねた詠み方もされており、この表現の発想はそこから来たのである。当該歌は、『注釈』が「秋が来ましたら、またいつでも、いらつしやいませ、と主人の長皇子が客の志貴皇子に挨拶したものと見るべきであらう」と指摘したように、宴における挨拶歌と捉えるべきであろうが、宴の挨拶に「鹿鳴」を詠み込むのは蘇武の詩や刀利宣令の詩のように客に酒を勧める意を含んでいるのではないかと考えられる。現在残されている『万葉集』には主人である長皇子の

歌しか記録されていないが、元暦校本、冷泉本、神田本などの目録には「右一首長皇子」の次に「志貴皇子御歌」の一行があり、主人の長皇子の歌に対して客人である志貴皇子も歌を残した可能性が高く、おそらく伝承の過程で脱落したのではないかと思われるが、志貴皇子の「石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりけるかも」(巻八・一四一八)をその歌であると見る説もある。²⁵⁾

三 宴と酒宴歌

土橋氏は酒宴における勸酒、謝酒などの儀礼の展開を指摘した。『詩経』小雅に饗宴の歌が多くあることは周知の通りであり、「鹿鳴」は酒宴歌で、勸酒の意を持つことはすでに述べてきた。『詩経』小雅の中には、勸酒に対する客人の謝酒歌と推測される詩もあり、「魚麗」はそのような詩であるといえる。

魚麗于罍	鱸鯈	魚麗に麗る、鱸鯈。
君子有酒	旨且多	君子酒有り、旨くして且つ多し。
魚麗于罍	魴鱧	魚麗に麗る、魴鱧。
君子有酒	多且旨	君子酒有り、多くして且つ旨し。
魚麗于罍	鰕鯉	魚麗に麗る、鰕鯉。
君子有酒	旨且有	君子酒有り、旨して且つ有り。

物其多矣	維其嘉矣	物其れ多し、維れ其れ嘉し。
物其旨矣	維其偕矣	物其れ旨し、維れ其れ偕し。
物其有矣	維其時矣	物其れ有り、維れ其れ時なり。

詩は最初から最後まで宴会の酒は旨く、酒肴の品々が備わって多いいことを詠み、最後はもてなしを「多」「嘉」「旨」「偕」「有」「時」の言葉で褒め称えている。朱熹は「燕饗通用之樂歌」と、上下通用する饗宴の歌としていて、宴会の歌であると思われる。金啓華氏は「歌讀貴族的酒肴、既多而又美²⁷⁾」と、貴族をもてなす酒食が多くて美しいことを讚美したという。この詩は酒肴が多くて美味であることを詠んだことから、「這首詩是客人感謝主人盛情宴飲招待、因此後來很自然地就成為宴享時的樂歌²⁸⁾」というように、客人が主人のもてなしに感謝した詩であるから、後に自然に宴の樂歌となったとの指摘がある。確かにこの詩は終始行き届いたもてなしを褒めて、美酒佳肴に満足するという内容であるから、客人の感謝の意を述べた詩で、謝酒歌と考えたほうが妥当であろう。そして次の「瓠葉」からは、宴における酒の飲み方を知ることができる。

幡幡瓠葉	采之亨之	幡幡たる瓠葉、之を采り之を亨る。
君子有酒	酌言嘗之	君子酒有り、酌みて言に之を嘗む。
有兔斯首	炮之燔之	兔の斯の首有り、之を炮き之を燔く。

君子有酒 酌言献立 君子酒有り、酌みて言に之を献ず。
有兕斯首 燔之炙之 兕の斯の首有り、之を燔き之を炙る。
君子有酒 酌言酢之 君子酒有り、酌みて之を酢ゆ。
有兕斯酒 燔之炮之 兕の斯の首有り、之を燔き之を炮く。
君子有酒 酌言醕之 君子酒有り、酌みて言に之に醕す。

詩は四章あるが、一章には蔬菜の作り方、二章から四章にかけて兔の頭の焼き方をいい、そして宴会での酒の飲み方を詠む。蔬菜と兔の頭という食べ物で客をもてなすことについて、朱熹は「蓋述主人之謙詞、言物雖薄、而必与賓客共之也。」(前掲書)といい、主人の謙遜の辞であるという。この詩では嘗、献、酢、醕で酒の飲み方の順序を表している。「酢」は客が主人に杯を返すことで、「醕」は客から注がれた杯を再び客に返すことをいう。主人がまず味見をし、客に献じ、客は主人に杯を返し、主人は再び客に勧めるのである。早くに鄭玄は「主人既卒酢爵、又酌自飲。卒爵、復酌進賓、猶今俗之勸酒」と、この飲み方を今の俗の勸酒であるという。この詩においては、主人の謙遜の辞と酒を勧める内容から、僅かに勸酒歌の痕跡が認められる。このように『詩経』の宴飲の詩からは朝廷または貴族の宴会の様子がある程度窺い知られ、詩の内容から勸酒、謝酒の意を汲み取ることにはできる。しかし、主人が酒を勧める時、また、客が返杯をする時にどのような歌が歌われたかについて

は、編纂を経て成立した書物からはこれ以上追究できない。

中国のこうした酒宴の歌文化は、歌掛け文化を持つ少数民族地域にも伝承されていて、今もなお酒宴で主人と客人による儀礼的な酒歌が歌われている。たとえば中国貴州省の侗族では酒歌が盛んに歌われており、筆者は現地侗族村に行った時に何度も聞いたことがある。侗族の場合は酒宴で歌われる歌を「酒歌」という。酒を飲む時に歌う歌なので、「勸酒」の意も含まれている。普通主人側が先に酒歌を歌い、それに対して客人が返す歌を「返歌」という。つまり主人から送られた歌に対して歌で返し、勧められた酒に対して酒を勧め返すという意である。ここで貴州省従江県に伝わる酒歌を見たい。まず主人が、

看見客人進村頭 客人が村に入るのを見て、
大胆上前把客留 勇気をもって客を引き留めた。
遇客实在不該講硬話 客に会って本当に大きな話をしてはいけない。
家里貧窮心中暗發愁 家は貧しくて心の中ではひそかに心配している。
家有火炉無木炭 家に暖炉はあるが木炭がなく、
河中有魚沒釣鉤 河に魚はいるが釣り針がない。
有肉之時客人不來到 肉がある時に客はいらっしゃらなく、

無肉之時貴客偏來遊 肉がない時に限って客は遊びに来る。

愧無好菜招待客 客にごちそうをもつてもてなすことがで

きず恥ずかしい、

敬客一杯淡水酒

客に勧める、一杯の淡水酒³⁰。

と歌う。主人は客を引き留めたが、家が貧しくて粗末なものしか出せなくて、客に「淡水酒」を勧めると歌う。淡水酒は水のような味のない酒のことである。主人は終始質素な酒食しか用意できていないことを歌い、謙遜の気持ちを表しているが、歌の主旨は客に酒を勧めることにある。これに対して客は、

樹大根深不怕刮大風 木は大きく深く根下ろしたから、大きい

風に吹かれることを恐れず、

河堤牢固不怕水來沖 堤は堅固であるから、波が寄せ来ること

を恐れない。

家中富有才敢講硬話 家が豊かであるから大きな話をするし、

莫要故意裝苦又叫窮 わざわざ貧乏を装う必要はない。

炉中有炭火苗旺 暖炉の炭は赤く焼き上がり、

鷄魚肉鴨滿盤中 鷄魚鴨肉が皿に満ちて、

主人手芸最是巧 主人の腕前は一番である。

糯米釀酒香味濃 糯米で醸した酒は香ばしく、

來到你家喝酒不用勸 あなたの家でお酒を飲む時には勧めなく

てもいい、

喝過三碗臉上紅彤彤 三碗飲むと、顔が赤くなっている。

と返す。客は主人の家が豊かであること、またごちそうと主人の料理の腕前、醸した酒などを褒めて歌い返す。客は主人を褒めることと、十分に酔ったことで感謝の気持ちを表すのである。これに対して主人はさらに歌を歌い、酒を勧める。すると客は充分頂いてもうこれ以上飲めないと歌い返す。酒宴が終わる頃に客側から感謝の意の挨拶歌が歌われると、主人は客を引き留める歌を歌い返す。このように同族の酒歌は、主人側は終始酒を勧める内容を歌い、客側は充分頂いてこれ以上飲めないことを歌う。こうした酒宴を通して友人や親戚同士、または村同士の友情を深める「和楽」を目指すものであった。

日本の古代歌謡の中にも、勸酒歌や謝酒歌と認められる歌が『古事記』に見えている。

是に、還り上り坐しし時に、其の御祖息長帯日売命、待酒を醸みて献りき。爾くして、其の御祖の御歌に曰はく、

この御酒は 我が御酒ならず 酒の司 常世に坐す 石立たす 少御神の 神寿き 寿き狂し 豊寿き 寿き廻し 奉り

来し御酒ぞ 止さず飲せ ささ

如此歌ひて、大御酒を献りき。爾くして、建内宿禰命、御子の為に答へて、歌ひて曰はく、

この御酒を 醸みけむ人は その鼓 白に立てて 歌ひつつ
醸みけれかも 舞ひつつ 醸みけれかも この御酒の 御酒
の あやに甚樂し ささ

此は、酒楽の歌ぞ。

これは酒楽の歌であるという。息長帯日売命が待酒を造り太子品陀和気命に献上した時に歌った歌と、太子に代わって建内宿禰命が答えた歌で一組になっている。一気に飲むことを勧める歌と、酒が歌い舞いつつ醸され気持ちよく酔ったと歌い返すこの一組は、先に述べた侘族の酒歌の形式と大体同じ系統にある。ただ侘族は質素なものしか出せないと、常に謙虚な気持ちを出すことに対して、ここは少御神が造った酒であると歌うのは太子に神性を付与するためと思われる。土橋氏は、「酒宴は仲間の連帯関係を強め、また新しく仲間となった者の間に連帯関係を作り上げることが目的としているから、主人側は客に無理やりでも酒を勧め、客人側はこれに答えて、十分に飲まなければならぬ。勸酒歌と謝酒歌は、そのような酒宴の目的を歌う儀式的な歌であり、したがって酒宴の初めに歌われる。」と述べており、これが中国の酒宴歌にも相通することは、

侘族の酒宴歌から確認した通りである。また古代歌謡には立歌、送り歌と認められるものもあり、これはすでに土橋寛氏に指摘されている。

『万葉集』の宴の歌に酒宴歌謡のような性格を明確に見出すのは困難であるが、酒宴歌謡の特徴を示しているものはいくつか見出せる。たとえば次の、

九年丁丑の春正月に、橘少卿と諸の大夫等との、彈正尹門部王の家に集ひて宴せる歌二首

あらかじめ君来まさむと知らませば門に屋戸にも珠敷かましを
(巻六・一〇一三)

右の一首は、主人門部王 後に姓大原真人の氏を賜る。

前日も昨日も今日も見つれども明日さへ見まく欲しき君かも

(巻六・一〇一四)

右の一首は、橘宿禰文成 即ち少卿の子なり。

榎井王の後に追ひて和へる歌一首〔志貴親王の子なり〕

珠敷きて待たましよりはたけそかに来る今夜し楽しく思ほゆ

(巻六・一〇一五)

は、主人と客との挨拶歌である。主人の門部王は君が見えることを

分かっていれば、門にも家にも玉を敷きつめておいたのに、と歌う。「珠敷かましを」は「来客に対して接待が不十分なことを詫びる常套句⁽³³⁾」と考えられる。橘文成は明日も主人を見たいと主人を褒める歌を歌う。榎井王の歌は題詞にあるように後に唱和した作で、「珠敷きて待たましよりは」は門部王の「珠敷かましを」を受けている。主人が不備を歌うのに対して、これで十分だと挨拶する。主人の謙虚な気持ちと客の感謝の意を表す内容から、酒宴歌の流れにあり、酒を勧めることは歌には詠まれていないのだが、当てはめようとすれば勧酒、謝酒になるだろう。『万葉集』の宴席歌から勧酒歌、謝酒歌を探し出すのはなかなか難しいが、次の歌には酒宴歌の性格がある程度明確に表れているように思われる。

市原王の、宴に父の安貴王を禱ける歌一首

春草は後の落易らふ巖なす常磐に坐せ貴きわが君（巻六・九八八）

湯原王の打酒の歌一首

焼太刀の稜打ち放ち大夫の禱く豊御酒にわれ酔ひにけり（巻六・九八九）

九八八番歌は市原王が宴で父の安貴王を寿ぐ歌である。九八九番歌は湯原王がますらおが祝ってくれて飲む美酒にわたしは酔った、

と詠む。わたしは酔ったと詠むのは、『古事記』歌謡に「須々許理が 醸みし御酒に 我酔ひにけり 事無酒 笑酒に 我酔ひにけり」（四九）とあり、土橋氏は『我酔ひにけり』の歌詞は、謝酒歌の伝統的歌词を用いたもの⁽³⁴⁾と述べている。湯原王の歌は、客として主人の歓待に感謝する歌であり、酒宴における謝酒歌であり、侗族という「返歌」になるだろう。

このように『万葉集』の宴席歌にも酒宴歌の約束を踏まえた、儀式的に詠まれた歌の存在が認められ、長皇子の歌もこの系列から理解すべきであろう。長皇子の挨拶に対して志貴皇子からは、感謝の気持ちを述べ主人を褒める歌が返されたと推測されるのである。

四 おわりに

以上述べてきたように、宴席で「鹿鳴」を詠み込むことは『詩経』「鹿鳴」詩を強く意識したものと考えられる。長皇子の歌における「鹿鳴」は、眼前に見る実景というよりも『詩経』の「鹿鳴」によったものと考えられ、「鹿鳴」の意味する賓客のもてなし、和楽、勧酒を踏まえたものであろう。従って長皇子の歌が宴席の挨拶歌であることは否定できないと考える。酒宴には勧酒、謝酒などの儀礼的な歌が展開していた。こうした酒宴歌は中国では『詩経』の詩にその痕跡を見ることができ、今では歌掛け文化を持つ少数民族地域で盛

んに歌われていることが確かめられる。日本でも『古事記』歌謡から酒宴歌が確認でき、歌の主旨は日中共通していると思われる。『万葉集』の宴席歌にも酒宴歌の約束を踏まえた歌が認められ、長皇子の歌もこの系列に位置づけるべきだと考える。長皇子の歌には酒を勧める内容ははっきり詠まれていないが、「鹿鳴」を踏襲することによって酒宴の「和楽」とともに「勸酒」を意識したことが考えられ、志貴皇子の返歌が本来存在した可能性が高いことを考え合わせると、酒宴の最初に歌われた酒を勧める歌と見ることも可能であろう。

注

- 1 『古代歌謡をひらく』（大阪書籍、一九八六年）。
- 2 『古代歌謡の世界』（塙書房、一九六八年）。
- 3 中西進『万葉集 全訳注・原文付』（講談社）による。以下同じ。
- 4 『万葉集講義』（宝文館）。
- 5 『万葉集全註釈』（角川書店）、日本古典集成『万葉集』（新潮社）、『万葉集全注』（有斐閣）、『万葉集釈注』（集英社）、『万葉集全歌講義』（笠間書院）。
- 6 注3。
- 7 新編日本古典文学全集『万葉集』（小学館）。
- 8 新日本古典文学大系『続日本紀』（岩波書店）。
- 9 『万葉集事典』（講談社）。
- 10 新編日本古典文学全集『万葉集』（小学館）。

- 11 「漢籍との比較から見た『鹿鳴』の歌―その巻頭性と表現性を中心に―」『国語文研究』第一〇五号、一九九七年三月。
- 12 漢詩大系『詩経』（集英社）による。書き下し文は部分的に訂正した。以下同じ。
- 13 『毛詩注疏』（商務印書館）。
- 14 注13。
- 15 『詩経全釈』（汲古書院、一九八四年）。
- 16 金啓華『詩経全訳』（江蘇古籍出版社、一九八四年）。
- 17 『後漢書』（中華書局）。
- 18 『詩集伝・楚辞章句』（岳麓書社）。
- 19 注11。
- 20 新釈漢文大系『文選』（明治書院）による。
- 21 注11。
- 22 江口孝夫全訳注『懐風藻』（講談社）。
- 23 『万葉集全注釈』（中央公論社）。
- 24 『校本万葉集』（岩波書店）。
- 25 『万葉集全注』（有斐閣）、『万葉集釈注』（集英社）。
- 26 注18。
- 27 注16。
- 28 『詩経百科辞典』上（遼寧人民出版社、一九九八年）。
- 29 注13。
- 30 楊国仁・呉定国編『侗族礼俗歌』（貴州人民出版社、一九八四年）。
- 31 新編日本古典文学全集『古事記』（小学館）による。

34 注2。
33 注7。
32 『古代歌謡全注釈 古事記編』(角川書店)。